

100kmの果てで得られたもの

紀伊 保

僕には夢があった。ウルトラマラソンを完走することだ。ウルトラマラソンとは、100kmを制限時間十四時間で走る競技だ。僕が選んだレースは、白山白川郷ウルトラマラソン。このコースは前半の20kmで白山の頂上まで約1000mを駆け上がり、後は下りが続くという難コースだった。去年は、途中リタイアした僕はリベンジに燃えていた。

レース当日は、まさかの土砂降り。午前五時。いよいよ号砲だ。やがて、最高地点『標高一四四五m』の看板にたどり着いた。ここまで、平均傾斜10%というクレイジーなコースだ。

この先、コースでは四五kmから二十kmほどは、なんの変化も刺激も日陰もまったくない「修行道」と呼ばれる道が続く。この道で、去年は灼熱の太陽に焼きつくされた。

六0km。ようやく中継地点にたどり着いた。エナジードリンクを一气飲みして、再スタートだ。表に出ると、土砂降りだった。人気がまばらになった国道横の歩道では、車が水たまりをはじく音と激しい雨音しか聞こえない。

去年はここで眠くてしよがなかつたが、今は元気に走っている。この足もこの身体も、この脳みそも全力でゴールを目指している。そう考えたら、胸の奥から感謝の気持ちが出た。きあがってきた。土砂降りの中、「ありがとう」と叫んでみた。この丈夫な体に産んでくれたこと、ここに挑戦できること、いままで支えてくれた心配してくれた妻のこと、土砂降りの中でエイドや交通誘導してくれるボランティアスタッフの人たちのこと……。涙があふれてきた。「ありがとう」と叫び、泣きながら走った。そして、「修行道」を走り切った。

八六km。ついに日本海が見えた。この潮風をどれだけ待ち焦がれたことか。エイドのたびに、大歓迎して応援してくれるボランティアスタッフに感謝しかない。やがて、ラスト5kmの表示が見えてきた。

走って歩いてを繰り返して、ようやくラスト1kmの表示まで来た。走り出すたびに足には激痛が走る。ゴールでは大勢の観客、応援団、大歓声、真つ暗な中に光るゴールポスト、そしてひととき輝くゴールテープ。やっとたどり着いた。長い長い100kmだった。ついに走り切ったのだ。この足で。この身体で。

ゴールのメダルをかけてもらったとき、「これが欲しかった」といってボランティアをハグしようと思っていた。でも……

僕は声を出して泣いていた。涙があふれるというようなレベルではなかった。声を上げて泣くというのを始めて実感したのかもしれないくらい全身で……泣いていた。ボランティアの女子高生たちがたくさんいる中で人目もはばからずに僕は泣いていたのだ。

誰のものでもない、僕だけの100kmの物語が、うれし涙とともに、いま完結した。